

がん治療について

ひとことにがん治療といっても対象となるがんの発症部位や進行度合いによって、大きく3種類に分けられます。外科的に病巣を取り出す手術療法、放射線を使いがん細胞の増殖を防ぎ破壊する放射線療法、抗がん剤などの化学物質（薬剤）によってがん細胞を破壊する化学療法、が大きな3つの治療法となります。近年では免疫療法と呼ばれる治療法も研究開発が進められており、一部に限られています。がん治療について



■がんとは？

- 悪性新生物とも呼ばれ日本では昭和56年以降、死因の第一位となっています。がんの原因、がんになる体の部位も様々です。また、同じ部位のがんでも見つけた時にどの程度病状が進行しているかによって選択する治療法が異なる場合があります。
- 基本的ながん治療の考え方は短期間で集中的に治療を行い、継続的に治療経過を観察していくというものです。生存率については昨今のがん医療の進歩により、5年生存率（がんと診断された人が5年後生存している割合）が約6割となっています。生存率の向上に伴って、がんを抱えながら仕事を継続している労働者も多くなっています。今後は、治療と仕事の両立ができるように周りの理解とサポートが重要になってきます。

■がん関連の情報について



がんに関する情報は様々な媒体で取り扱われています。その中で正確な情報を得るためには出展がわかっているものを選んでいく事が重要です。国立がん研究センターは、日本国内のがん医療・がん研究の拠点となる機関で、すべての国民に最適ながん医療を提供することを理念として掲げています。センターが運営するがん情報サービスのサイトでは、日本における様々ながんの情報を提供しており、がんの基礎知識や診断・治療、症状や生活について記載されているので参考に見てみるとよいでしょう。

■がんの治療について

■主ながん治療（3大治療）

がん治療においては、がんの種類や進行度に応じて、手術（外科治療）、化学療法（抗がん剤治療）、放射線治療等の様々な治療を組み合わせる「集学的治療」が基本となっています。これらの3大治療のほかにも、免疫療法、ホルモン療法や分子標的薬などがあり、手術終了後もほかの治療が続くことも少なくないため、「手術が終われば治療終了」とは限りません。

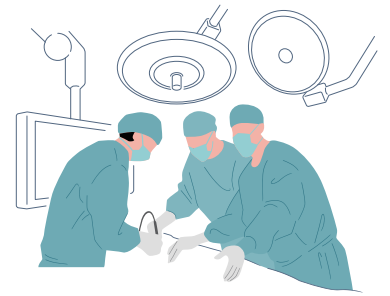
また、がんの種類や進行度等に応じて、標準治療と呼ばれる治療ガイドラインに基づく一般的な治療法が定められているものの、それがあてはまらない患者さんも多く、治療内容と治療に要する期間は個別に確認することが必要になります。



■がんの主な3大治療法（+免疫療法）

手術（外科治療）

- 手術では、がん組織や周りのリンパ節を取り除きます。
- また、取り除いた臓器や器官の再建（臓器などを取り除くことによって、損なわれた体の機能や外観を元の状態に近づけるための手術）などの処置が行われます。
- 他の疾病と同様に早期発見が重要です。がんの発見が早ければ切除の範囲をできるだけ小さくし、術後の生活の質を保つことができます。



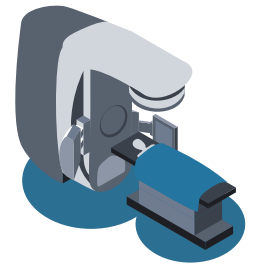
化学療法（抗がん剤治療）と免疫療法

- 細胞の増殖を防ぐ抗がん剤を用いた治療法で、がんがふえるのを抑えたり、成長を遅らせたり、転移や再発を防いだり、小さながんで転移しているかもしれないところを治療するためなどに用いられます。
- 手術治療や放射線治療が、がんに対しての局所的な治療であるのに対し、化学療法（抗がん剤治療）は、より広い範囲に治療の効果が及ぶことが期待できます。このため、転移のある時、その可能性がある時、予防する時、血液・リンパのがんのように広い範囲に治療を行う必要のあるときなどに行われます。
- 化学療法（抗がん剤治療）には主に、錠剤やカプセルなどの「のみ薬」による方法と、「点滴や注射などで血管（静脈）に直接抗がん剤を注入する方法」があります。



放射線治療

- 放射線治療は、がんを治すことを目的として単独で行われることもありますが、化学療法や手術などの他の治療と併用して行われることもあります。
- 放射線治療は、体の外から放射線を当てる「外部照射」と、体の内側から、がんやその周囲に放射線を当てる「内部照射」に分けられる。両者を組み合わせて行うこともあります。



免疫療法

- また他の3大療法とは少し異なりますが、本来の免疫機能を利用してがんを攻撃する免疫療法というものもあります。効果が証明された免疫療法はまだ一部に限られており、治療法や薬なども限られています。が、保険診療（公的医療保険）で受けることができます。

●治療と仕事の両立について

日本において生涯 がんにかかる可能性はおおよそ2人に1人になります。そのうちがん患者の約3人に1人は、20代から60代でがんを罹患し、仕事をもちながら通院している方が多くいます。がん治療の進歩により、5年相対生存率は53.2%（平成5年～平成8年）から68.9%（平成22年～平成24年）と改善傾向にあり、がんと診断された時から治療と仕事の両立について気軽に相談できる環境が整備されてきています。

事業所と病院などの治療機関と連携して、治療と仕事の両立を社会的にサポートする取り組みもあるので、ガイドラインなどを参照して活用するとよいでしょう。



【参考文献】「事業場における治療と仕事の両立支援のためのガイドライン令和6年3月版厚生労働省」 p.27～がんに対する留意事項
(<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/001179451.pdf>)
国立がん研究センター がん情報サービス (<https://ganjoho.jp/public/index.html>)